

民族的ステレオタイプと好悪感情についての一考察*

大阪学芸大学

原谷達夫 松山安雄 南 寛**

I 問題

無知は偏見の母胎であり、偏見的態度は社会的葛藤の有力な変数である。偏見を克服することは民主教育における大きな課題である。通常人々は複雑な社会組織を知りつくすことが困難であるため、おおまかな範疇概念によつて社会事象を認知伝達することをよぎなくされる。その随伴現象として、範疇のなかにある種の固定観念をうえつけて（すなわち、範疇の単純化と特定観念の汎化を行なつて）客観的真実から遠ざかる可能性が生じる。これがいわゆるステレオタイプ化現象であり、G. W. Allport によるなら「範疇に結びついた信念の誇張であり、当該範疇に関連するところの行為を正当化する作用」と定義づけられる(1)。

ここに明確度や好意度を異にする民族的国家的ステレオタイプを研究対象としてとりあげるのは、民主教育の国際的視野という背景を重視するとともに日常社会の葛藤を考察していくうえで、のなんらかの示唆を期待できるかと思うからである。ステレオタイプ化現象を解明するうえで、この領域を追求する意義はあらためて論じるまでもあるまい。すでに研究の操作的基盤は D. Katz & K. W. Braly によつて築かれ(3)、民族的文化的差異を見ようとする比較資料が数多く発表されている(2)(6)(7)(8)(9)(12)。

本研究においても、まず、わが国の学生群が民族的国家的諸集団に対しどのようなステレオタイプを持つかを調査し、えられた資料と外国資料との比較をもとにして論考を進める。とくに問題設定の軸を日本人集団に置くのであるから、民族的好悪感情に関するわが国の文献資

* Study on stereotypes and preferences among Japanese students toward themselves and other national and ethnic groups.

** by Haratani, Tatsu; Matsuyama, Yasuo & Minami, Yutaka (Osaka University of Liberal Arts and Education)

料を発展的にとりあげたいと考えた(4)(10)。なお、考察を進めるうえで、日本ユネスコ国内委員会が加盟5周年の記念に刊行した総合実験報告書の内容から有益な示唆を受けたことに対し感謝したい(5)。

II 手続き

被調査群は大阪市在住の小学生(6年生—100人)、中学生(3年生—129人)、高校生(2年生—94人)、大学生(学芸学部2回生—70人)。調査年月は1958年10月。研究対象としては前記文献(4)(10)との比較を考慮して、12の民族的国家的集団(日本人、アメリカ人、イギリス人、ソ連人、フランス人、中国人、ドイツ人、朝鮮人、インド人、イタリア人、ユダヤ人、黒人)を選び、次の[A][B]両課題を与えた。なお、調査に要した時間は両課題を通じて30~40分である。

課題[A]: Table 1に示すような100個の特性表のなかから、12の対象集団ごとに“当該集団にとつて最も適切だと思われるところの特性番号”を5個ずつ選ばせる。ここに使用した特性用語は、Katz & Braly以下諸研究者のものを参照して編成したのであるが、被調査者がさらに適切な用語をあげようとするなら随意101番以降に付記させた。他方、小学生にとつてはこれら用語の難解であることを考慮し、対象集団ごとに文章完成法を試みた。

課題[B]: 12の対象集団を好悪の順に配列させる。

Table 1 特性表

1 あさはかな	10 音楽的
2 圧制的	11 外見をかざる
3 暗示にかかりやすい	12 科学的
4 意志の強い	13 革命的
5 意志の弱い	14 家族的結合の強い
6 陰気な	15 金持ちの
7 疑い深い	16 がんこな
8 臆病な	17 感情的
9 おとなしい	18 寛大な

- 19 官能的
- 20 敏楽的
- 21 きたならしい
- 22 機敏な
- 23 狂信的
- 24 規律正しい
- 25 金銭づくの
- 26 勤勉な
- 27 空論的
- 28 くさい匂いの
- 29 軍国主義的
- 30 芸術的
- 31 けちんぼう
- 32 けんか好き
- 33 頭のよい
- 34 高慢な
- 35 個人主義的
- 36 国家主義的
- 37 残酷な
- 38 自己ぎせいの
- 39 自主的
- 40 実践的
- 41 実力のある
- 42 慈悲深い
- 43 社交的
- 44 宗教的
- 45 執念深い
- 46 正直な
- 47 情熱的
- 48 商売上手な
- 49 思慮深い
- 50 紳士の
- 51 神経質な
- 52 進歩的
- 53 進歩のおそい
- 54 親切な
- 55 信頼できない
- 56 侵略的
- 57 スポーツマン的
- 58 ずるい
- 59 清潔な
- 60 想像力に富む
- 61 だらしない
- 62 短気な
- 63 単純な
- 64 忠実な
- 65 伝統を愛する
- 66 どっしりおちついた
- 67 どれい的
- 68 どんかんな
- 69 なまけものの
- 70 ぬけ目ない
- 71 のんきな
- 72 馬鹿な
- 73 馬鹿正直な
- 74 はでな
- 75 反逆的
- 76 犯罪的
- 77 秘密主義的
- 78 貧乏な
- 79 不正直な
- 80 物質主義的
- 81 平和的
- 82 へりくだった
- 83 保守的
- 84 民主的
- 85 むじゃきな
- 86 迷信的
- 87 野心的
- 88 野蛮な
- 89 勇敢な
- 90 ユーモアのない
- 91 模倣的
- 92 欲深い
- 93 陽気な
- 94 弱々しい
- 95 利己主義の
- 96 理屈っぽい
- 97 旅行好き
- 98 礼儀正しい
- 99 立派な
- 100 忘れんぼう

表から除外する*。

Table 2—㉔ 日本人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	勤勉な	38	模倣的	40	模倣的	51
	家族的結合の強い	27	勤勉な	32	家族的結合の強い	41
	貧乏な	27	伝統を愛する	28	勤勉な	33
	外見をかざる	23	家族的結合の強い	27	意志の弱い	30
	伝統を愛する	20	意志の弱い	**22	外見をかざる	27

**第5位の特性が同じ被選択率のため重複するときは列挙する

Table 2—㉕ アメリカ人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	金持ちの進歩的	47	金持ちの社交的	52	金持ちの物質主義的	36
	派手な	30	派手な	38	社交的	24
	民主的	29	進歩的	22	派手な	24
	旅行好き	25	陽気な	19	侵略的	21

Table 2—㉖ イギリス人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	紳士の	73	紳士の	68	伝統を愛する	49
	社交的	33	伝統を愛する	40	紳士の	39
	礼儀正しい	33	礼儀正しい	35	保守的	33
	規律正しい	33	保守的	31	規律正しい	27
	清潔な	20	規律正しい	28	礼儀正しい	24

Table 2—㉗ ソ連人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	秘密主義的	64	秘密主義的	68	秘密主義的	39
	国家主義的	28	国家主義的	39	意志の強い	31
	軍国主義的	25	革命的	28	革命的	31
	実力のある	25	実力のある	26	国家主義的	29
	侵略的	21	圧制的	22	圧制的	23
			科学的	22	科学的	23

III 結果の整理

1 各民族集団についてのステレオタイプ

課題〔A〕に関してはそれぞれの民族的国家的集団ごとに被調査者群から選択された諸特性の頻度(%)を計算し、その値の高い順に整理する。Table 2—㉔~Table 2—㉗は、各集団ごとに上位5個の特性用語ならびにその被選択率をかかげたものである。小学生群の資料は、外延的特性(たとえば、“背が高い” “色が黒い” など)により大部分が形成された事実を指摘するにとどめ、本

* Table 2 では、比較のため、Katz & Braly によるプリンストン大学学生100人の調査(1932)、Gilbertによる同大学学生 333 人の調査(1950)、Prothroによるアルメニア大学生 100人の調査(1952)、Rath & Dathによるインド大学生100人の調査(1957)の結果が記されているが紙面のつごうで割愛した。(編集部)

Table 2-③ フランス人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	芸術的	74	芸術的	73	芸術的	51
	派手な	30	革命的	28	社交的	41
	革命的	29	音楽的	26	音楽的	26
	社交的	27	社交的	21	感情的	20
	音楽的	26	官能的	20	官能的	20

Table 2-④ 中国人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	ずるい	21	商売上手な	34	革命的	23
	欲の深い	14	ぬげ目ない	22	勤勉な	19
	信頼できない	14	実践的	16	実践的	19
	陰気な	13	国家主義的	13	商売上手な	17
	きたならしい	12	執念深い	13	意志の強い	16
	だらしない	12			家族的結合の強い	16
	ぬげ目ない	12				

Table 2-⑤ ドイツ人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	科学的	57	科学的	64	科学的	54
	頭のよい	50	頭のよい	43	頭のよい	37
	勤勉な	37	勤勉な	34	勤勉な	34
	意志の強い	28	想像力に富む	27	意志の強い	26
	音楽的	19	意志の強い	22	理屈っぽい	21

Table 2-⑥ 朝鮮人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	きたならしい	38	くさい匂いの	37	だらしない	26
	くさい匂いの	37	きたならしい	30	きたならしい	21
	信頼できない	26	執念深い	21	くさい匂いの	20
	ぬげ目ない	22	だらしない	19	進歩のおそい	20
	だらしない	21	ずるい	18	疑い深い	13
	犯罪的	21	貧乏な	18		

Table 2-⑦ インド人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	宗教的	49	宗教的	46	宗教的	54
	迷信的	29	貧乏な	36	平和的	27
	平和的	19	平和的	28	迷信的	20
	勇敢な	15	迷信的	28	進歩のおそい	16
	慈悲深い	13	進歩のおそい	21	貧乏な	14
	進歩のおそい	13				
	のんきな	13				
	伝統を愛する	13				

Table 2-⑧ イタリア人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	情熱的	36	情熱的	49	情熱的	43
	陽気な	24	音楽的	31	音楽的	40
	感情的	23	陽気な	30	芸術的	33
	音楽的	22	芸術的	20	陽気な	26
	平和的	19	官能的	16	感情的	21

Table 2-⑨ ユダヤ人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	宗教的	43	宗教的	36	商売上手な	31
	迷信的	26	商売上手な	24	金銭づくの	26
	欲深い	17	金銭づくの	22	欲深い	26
	けちんぼう	15	陰気な	19	ぬげ目ない	24
	金銭づくの	15	欲深い	16	宗教的	23

Table 2-⑩ 黒人

被 査 調 群	中学生	%	高校生	%	大学生	%
特性	どれい的	60	どれい的	55	どれい的	37
	野蛮な	43	進歩のおそい	30	貧乏な	20
	進歩のおそい	41	単純な	29	野蛮な	20
	忠実な	25	忠実な	27	進歩のおそい	17
	スポーツマン的	14	野蛮な	27	単純な	16
	勇敢な	14				

2 一致度指数*の算出

Katz & Braly の手法にしたがい、被選択特性の頻度を計測してステレオタイプの一一致度指数を表示したのが Table 3 である。すなわち、それぞれの民族的国家的集団について、全選択度数（本調査の場合は被調査者数×5）の半分をみたすために必要な特性用語の最低個数を分母とし、被調査者全員を通じ選択特性の内容が完全に一致した場合の当該用語個数（2.5）を分子とする数値を求める。したがって、指数1は一致度の最高値を意味するわけであり、特性用語の選択が分散するほど分母の値が増大する。このことは、指数が小さくなるにつれてステレオタイプの内容が一致性を欠き不明確になるものと解される。

3 民族的好悪感情

課題〔B〕に関しては、小学生群から大生学群へまたがる順位の変動を Fig. 1 に示すとともに、今回の全員の平均順位を Table 4 に求め、1941、1946 両年度の資

* index of stereotype consistency

森東吾・万成博氏の共訳（ニューカム：社会心理学。培風館、1956）では「明確度」となっている。

料と照合して順位相関を算出した。

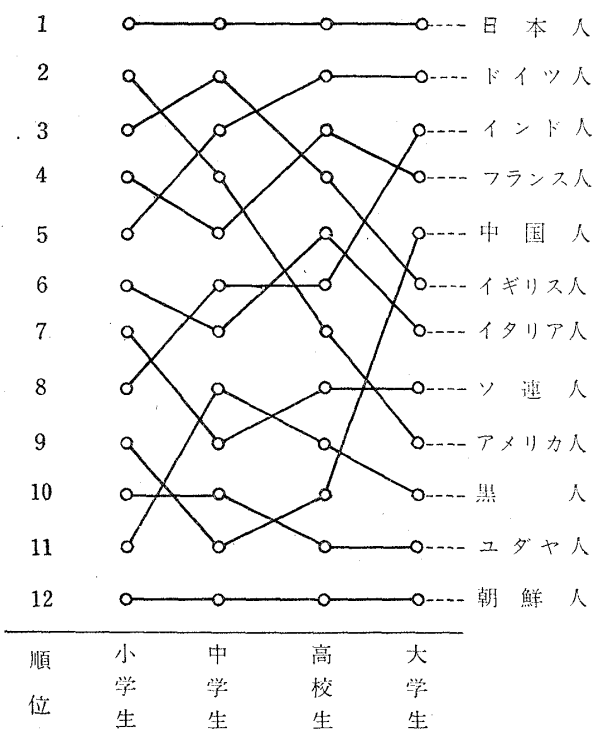
IV 考 察

以上の結果に現われた民族的文化的差異を比較解明するにあつては、ステレオタイプ化現象に共通の法則性を論拠とすべきであろう。そこで、考察の出発点としてステレオタイプ化という態度構成における論理的な2要因、すなわち知的要因と感情的要因、との関連性をまず

Table 3 ステレオタイプの一一致度指数

被調査群 集団	年 度			年 度			
	中学	高校	大学	1932	1950	1952	1957
日本人	.20	.22	.31	.23	.10	.38	—
アメリカ人	.27	.27	.23	.28	.18	.57	.49
イギリス人	.31	.40	.30	.36	.27	.68	.49
ソ連人	.26	.32	.29	—	—	.38	.50
フランス人	.36	.32	.31	—	—	.30	—
中国人	.13	.16	.18	.21	.17	.32	.36
ドイツ人	.30	.36	.32	.50	.40	.33	—
朝鮮人	.25	.24	.18	—	—	—	—
インド人	.18	.33	.22	—	—	—	.63
イタリア人	.17	.28	.39	.36	.22	.43	—
ユダヤ人	.16	.23	.24	.45	.23	.61	—
黒人	.27	.27	.20	.54	.21	.26	—
AV	.24	.28	.26	.37	.22	.43	.49

Fig. 1



今回の資料のうえに求める。

Table 5 は、一方で対象集団ごとに上位10個のステレオタイプ的特性の意味内容を検討し、その中で好意的特性であると判定されるものが占めるところの選択比率を計測することによつて各集団を順序づけたところの変数軸と、他方で単なる好悪による選択順位 (Fig. 1 参照) から成るところの変数軸とを求めて相関を見出した表である。

Table 4 民族的好悪感情の推移

集団名	年 度		
	1941	1946	1959
日本人	1	1	1
アメリカ人	5	2	5
イギリス人	6	5	3
ソ連人	12	9	8
フランス人	7	4	4
中国人	9	7	9
ドイツ人	2	3	2
朝鮮人	4	12	12
インド人	8	8	6
イタリア人	3	6	7
ユダヤ人	11	11	11
黒人	10	10	10
$\rho = .63$	$\rho = .92$	$\rho = .59$	
1941・1946	1946・1959	1941・1959	

Table 5 ステレオタイプ的好意度と民族好悪順位との相関*

集 団 名	ステレオタイプ的好意度 %	民族好悪順位
日本人	18.2	10
アメリカ人	50.2	6
イギリス人	81.3	2
ソ連人	42.9	8
フランス人	55.0	5
中国人	62.7	3
ドイツ人	88.2	1
朝鮮人	0	12
インド人	47.2	7
イタリア人	57.7	4
ユダヤ人	33.6	9
黒人	14.5	11

$\rho = .50$

この表では、Katz & Braly もすでに指摘したとおり“ステレオタイプの特性の内容における好意度合と民族的集団に対する好悪の順位とは、概して平行関係にあるが、かならずしも完全な合致をもたらさない”という傾向が明らかである。そして、本調査の場合、とくに注意を要すると考えられるのが、日本人に対する態度（自己帰属感）に現われたところの両変数間の極端な矛盾である。同様の傾向は他にも、たとえばイギリス人に対する態度とインド人に対する態度とを対比した場合に明らかとなり、見出される。これを論理的に説明するなら民族的態度における知的要因と感情的要因との分裂であるといえよう。もとより、このような分裂現象は、ステレオタイプ化自体が未分化な態度組織であるところから当然予想された結果ではあるが、資料比較の意義を深めるものは分裂の具体的な形態を追求することにあると思う。以下、論旨を2つに区分してまとめていきたい。

1 認知的要因：ステレオタイプの特性の一致度

すでに見たとおり、Table 2 では12の対象集団に対して本調査群が示したところのステレオタイプの特性は、各集団ごとにかなり特異である。そして Table 3 はそれら集団の特性像がどの程度まで明確であるかを計測したわけである。Table 3 の一致度指数は全般的にさほど高くないことがわかる。このことはどのように考察されるべきか。

Gilbert は、プリンストン大学生が1932年度から1950年度に及ぶ18年間に、一致度指数をめだつて低下させた根拠について、

- i) 社会科学的知识の浸透
- ii) 学生層の大衆化
- iii) マス・メディアの自戒啓蒙

というような諸条件を考え、一致度指数の低下という現象を認知的要因の分化であるとして歓迎している。

Gilbert の解釈は、国情を異にする本資料にとつてそのままではまるはずのものではないが、かなりの示唆に富むことは見のがせない。まず、i) 社会科学的知识という点に関しては、“かかる調査は被験者に対して汎化を強要するものであり、とりもなおさず知性を侮辱するものである” (3, p. 252) とのきびしい批判の声が今回の大学生群からも発せられた。さらに、ii) 学生層という点に関しては、アルメニア大学生群、インド大学生群における一致度指数がそれぞれ高い (Table 3) 事実と

対比するなら、本資料の場合はいちおう妥当 (すなわち elite 層ではない) と考えられる。けれども、一致度指数を上下させる具体的条件についての明快な断定を行なうことの不可能である点は今回の資料の限界かと思う。たとえば、有意差とまではいえないにせよ中学・高校・大学の3群の一致度指数のうち、最も知識乏しいはずの中学生群の値が最低となつた事態はその感を深くさせる。

われわれとしては、一致度指数の低さを解釈するにあたり、一義的に知的分化のためであると断じることが控えたい。その面の可能性とならんでもうひとつの面の可能性が浮かんでくる。すなわち、ユネスコ国内委員会の実験報告書もいうとおり、本邦学徒にとつては“人種問題はやや観念的であるかもしれない(5, p. 56)”段階であり*異民族集団に対する無関心性がみられるのであり、そのためにこそステレオタイプの特性像が不明確となつている。少なくとも中学生群の場合一致度指数が低いのは知的分化のためとのみ考えられない。Table 3 に、そのような事例を求めると、イタリア人に対する一致度指数、また朝鮮人に対する一致度指数の、各学令群ごとの推移の傾向はまさしく逆である。おそらく、前者の場合は熟知度が低すぎるための値であると解釈してよいであろう。

2 感情的要因：偏見機能について

Fig. 1 と Table 4 とを通観したうえで指摘したいことは、内集団 (日本人) を第1位に選択する態度が学令の推移と時流の変化とを越えて明らかに一貫性を有する反面、外集団を選択する順位がある程度の動揺性を有することである。しかも、なお、Table 4 の順位相関係数の高さが意味するとおり、このような動揺性を阻むところのなんらかの固定化傾向が存在することである。この固定化の事実を解明するものとして、ステレオタイプ化現象における感情的要因が検討されるわけである。

具体的にいうなら、欧米資本主義の先進国に対する選択順位は概して上位にある Fig. 1 における大学生群の選択形態だけがわずかに例外的傾向をもたらすにすぎない。また、民族的少数者集団を国際的に代表すると解されるところの黒人・ユダヤ人に対する選択順位は例外なく下位にある。とくにわれわれの注目したい点は、朝鮮人に対する態度である。1941年度の日独伊軍事同盟下の事例を除外するなら、この集団に対する選択順位は

* 資料は大学生群の場合に限定された。なお上位5特性に関するステレオタイプの好意度の%なら Table ②によつて中学生群、高校生群の場合も求めることができる。

* 委員会の報告書にみられるところの東京、広島両教育大学附属高校生のインドネシア人に対する態度、イギリス人に対する態度の研究は、この段階の真実であることの妥当性をよく示していると思うし、ステレオタイプの態度変容の具体例を扱った貴重な資料である

決定的に最下位なのである。

われわれは考察の出発点として Table 5 をかかげたのであるが、そこで注意したことは、日本人の自己帰属感における知的・感情的両要因間の高度の矛盾（選択順位が第1位であるにもかかわらずステレオタイプの特性像の好意度合は第10位である）という点であつた。この事実を、今度は、朝鮮人に対する態度にみあたるところの知的・感情的両要因間のいちじるしい合致性という事象へ照合させたい。日本人にとり、日本人集団と朝鮮人集団とは、歴史的地理的条件からいつて、対象12集団のうちで最も熟知度の高い集団である。それが、なぜこれほどのきわだつた対照を示すのであろうか。

態度理論に説明を求めるなら、こうした対照を生じさせるうえで大きな比重をもつものこそステレオタイプ化固有の偏見の機能であるといえよう。ここに、あえて“偏見”という語を使用するのであるが、その論拠として次の点をあげたい。i) は、Table 5 における内集団像の好意性度合 (18.2%)*が低すぎる点である。諸外国の研究(2)(7)(9)(12)における当該数値は概して50%を越えなかにには100%近いものさえ見られる。おそらく、社会心理学者は、民族中心主義が優越感という形態をとることに対してさほど疑義を感じないはずだと思う**。そ

れが、本調査にあつては、逆に劣等感という形で出ているのである。かりに、このような倒錯をば、第2次大戦以降における日本の国際的地位とか政府の外交方針にもとづく必然の結果であると解釈しうるにせよ、民族的劣等感がかかなり強いという事実は、偏見の機能化にとつて有利な素地であることを見逃すわけにはいかない。

ii) は、朝鮮人に対するステレオタイプ像が極度に非好意的だという点であり、この理由として、上述の自己帰属的劣等感が隣国人に対して投射されたのであろうとする推論が成り立つ。ユネスコ実験学校の川崎市田島中学校での“朝鮮人に対する偏見の除去について”という報告 (5, p. 134~184) が示すとおり、本邦学徒たちの朝鮮人集団に対する一般的態度感情は、客観的認識を深められるとき、容易にステレオタイプのな消極性から変容して理性的な積極性のものへと移行する可能性がある。また Table 3 にみる各学令群ごとの朝鮮人に対するステレオタイプの特性の一致度指数の推移が示唆するところを考慮するなら、知的抵抗の乏しい場合ほど民族的劣等感を代償させるための投射幕としてこの集団像のステレオタイプ化が用いられやすいといえそうである。

かりに、一步退いて、本調査にみられたところの非好意的特性像を裏づける事由として李承晩政権の対日外交

* この算定はわれわれの判定によるものであるから、念のため Table 6 を添えておく。

**森東吾・万成博氏共訳の前掲書では ethnocentrism の訳語が「民族的優越感」となつている。

Table 6 ステレオタイプ好意度 (Table 5) に関する算出例

㉑ 日本人像

㉒ 朝鮮人像

調査群	中学生 %	高校生 %	大学生 %	
特性	勤勉な 38	模倣的 40	模倣的 51	
	家族的結合の強い 27	勤勉な 32	家族的結合の強い 41	
	貧乏な 27	伝統を愛する 28	勤勉な 33	
	外見をかざる 23	家族的結合の強い 27	意志の弱い 30	
	伝統を愛する 20	意志の弱い 22	外見をかざる 27	
	頭のよい 16	自己ぎせいの 15	貧乏な 19	
	模倣的 16	外見をかざる 14	保守的 19	
	商売上手な 14	けんか好き 14	ユーモアの 19	
	短気な 13	ユーモアの 14	伝統を愛する 17	
	意志の強い 13			
	好意度*	48.8%	26.3%	18.2%

調査群	中学生 %	高校生 %	大学生 %	
特性	きたならしい 38	くさい匂いの 37	だらしない 26	
	くさい匂いの 37	きたならしい 30	きたならしい 21	
	信頼できない 26	執念深い 21	くさい匂いの 20	
	ぬけ目ない 22	だらしない 19	進歩のおそい 20	
	だらしない 21	ずるい 18	疑い深い 13	
	犯罪的 21	貧乏な 18	残酷な 11	
	ずるい 20	陰気な 14	執念深い 11	
	けんか好き 17	けんか好き 14	ずるい 11	
	欲深い 17	野蛮な 14	ユーモアの 11	
	不正直の 15	信頼できない 13	意志の弱い 10	
	好意度	0%	0%	0%

* 好意的特性であるとわれわれが判定したもの (ゴチック) の%値の和を全%和で割つた比率。

なお、他にたとえば“家族的結合の強い”というような特性を好意的であると判定すべきか否かという疑問も一応提出された。

とか在日朝鮮人の置かれた社会的悪条件とかの現実を列挙したところで、“だから選択順位が最下位である”という帰結にならないことはこれまでの論述が明らかにするとおりである。むしろ、知的・感情的両変数のこの場合における合致性を“事実を誇張してまでネガティブな信念を汎化する(1, p. 9)”というステレオタイプの偏見機能の典型化としてとらえることが重要であろう。

V 要 約

1. 12の民族的国家的集団に対する大阪市在住学徒のステレオタイプが質問紙法によつて求められ、各集団ごとに上位5特性を表示した。
2. Katz & Braly の手法により、中学生、高校生、大学生という標本群ごとにステレオタイプの一致度指数を求め、それぞれ .24, .28, .26 という平均値を得た。
3. 民族的好悪感情の順位を測定した結果から、ステレオタイプを通して示された好意性との関連を考察した。とくに注意されたのは、日本人学生の自己帰属感における知的感情的両側面の不一致である。
4. 対照的な結果として朝鮮人に対するステレオタイプの非好意性と選択順位の低さとの合致が指摘され、検討が加えられた。
5. われわれが得た成果を理論的に次の2点に集約してみた。
 - i) 本邦学徒の一致度指数があまり高くない根拠としては、知的分化という面のほかに、民族的無関心という面が指摘されよう。
 - ii) 欧米資本主義的先進国に対する日本人学徒の劣等感、朝鮮人のステレオタイプ像へ投射される可能性があり、客観的理性にもとづく認識により偏見を克服する必要があると感ぜられる。

文 献

- (1) Allport, G. W. : *The nature of prejudice*.

Cambridge : Addison-Wesley, 1954.

- (2) Gilbert, G. M. : Stereotype persistence and change among college students. *J. abn. & soc. Psychol.*, 1951, 46, 245-254.
- (3) Katz, D. & Braly, K. W. : Racial stereotypes of 100 college students. *J. abn. & soc. Psychol.*, 1933, 28, 280-290.
- (4) 楠弘閣 : 民族好性品等の研究. 心理学研究, 1941, 16, 2, 日本心理学会第8回大会報告64.
- (5) 日本ユネスコ国内委員会 : 国際理解の教育——総合実験研究——昭 32. (同委員会刊, 非売品)
- (6) Prothro, E. T. : Crosscultural patterns of national stereotypes. *J. soc. Psychol.*, 1954, 40, 53-59.
- (7) Prothro, E. T. & Melikian, L. H. : Studies in Stereotype III : Arab students in the Near East. *J. soc. Psychol.*, 1954, 40, 237-243.
- (8) Prothro, E. T. & Keehn, J. D. : Stereotypes and semantic space. *J. soc. Psychol.*, 1957, 45, 197-209.
- (9) Rath, R. & Das, J. P. : Study in stereotypes of college freshmen and service holders in Orissa, India, towards themselves and four other foreign nationalities. *J. soc. Psychol.*, 1958, 47, 373-385.
- (10) 佐藤幸治 : 心理学の基礎. 黎明書房, 昭 23. 137-144.
- (11) Vinacke, W. E. : Stereotypes as social concepts. *J. soc. Psychol.*, 1957, 46, 229-243.
- (12) Zaidi, S. M. & Mesbahuddin Ahmed : National stereotypes of university student in East Pakistan. *J. soc. Psychol.*, 1958, 47, 387-935.

(1959年7月16日 原稿受付)